静岡の茶草場農法

Traditional Tea-grass Integrated System in Shizuoka

稲垣 栄洋*・楠本 良延**

Hidehiro INAGAKI And Yoshinobu KUSUMOTO

1 茶草場農法とは

市場の国際化が進む中で、世界の農業は効率化や省力化が強く求められている。そして、農業の近代化に伴って昔ながらの伝統農業は失われつつある。しかしながら、手間を省くことなく、むしろ手間を掛けて良品質な農作物を生産してきた伝統的な日本農業の中にも、重要な強みが含まれていることだろう。

静岡県で古くから行われてきた「茶草場農法」もまた、良質な茶を生産するために行われてきた伝統農法である。

かつて日本の農山村では、畑の肥料や家畜の飼料、茅葺屋根の材料などに用いるために「かや場」と呼ばれるススキ等を優占種とした半自然草地を有していた。1880年の記録では、日本の国土の30%は半自然草地に覆われていたとされている¹⁾。しかしエネルギー革命後、人々の生活が近代化する中で、ススキは用いられなくなり、里山の半自然草地は今や国土の1%にまで減少している¹⁾。そして、半自然草地に自生する動植物も著しく喪失しているのである。

ところが、静岡県の茶園周辺には、今でも管理された「茶草場」と呼ばれる半自然草地が見られる。そして、秋から冬にかけて茶草場の草を刈り取り、天日で乾燥させてから、茶園の畝間に敷いていく「茶草場農法」という伝統的な農法が今も守られているのである。草を刈り、束ねて干し、茶園に敷くという作業は今でも手作業で行われており、大変な重労働である。しかし、茶園に草を入れることで茶の香りや味が良くなるとされており、茶農家は良いお茶を作るために手間ひまを掛けてきた。この農家の作業によって、半自然草地が維持され、草地の生物多様性を保全されていたのである。

草刈りによって維持される日当たりの良い草地では、さまざまな里山の植物を見ることができる。また、秋の七草をはじめ、ササユリやリンドウ、ホトトギス、ワレモコウなど、茶草場で見られる植物には、茶の湯の席に

写真1 世界農業遺産の中心地域である掛川市の粟ヶ岳山の斜面の茶草場に、茶文字の形にヒノキの木が植えられている。

活けられる茶花も多い。「茶草」を活用した茶生産が、失われつつある草原の植物を保全し、「茶花」を守り伝えてきたのである。

農業や農山村は、生物多様性を保全することが指摘されている。しかし、農業の生産性を高めようとするれば、生物を犠牲にすることが多い。一方、生物を保全しようとするれば、農業の生産性を犠牲にしなければならないこともある。このような中で、茶草場農法は、高品質な茶を生産するという農業生産性を高める努力が、生物多様性を保全してきた貴重な例の1つである。かつて手間ひまを掛けて作られた良質な茶は、高い価格で取引されてきた。しかし近年では、ペットボトル用の安価な茶の需要が高まる一方、高級茶の価格が低迷しており、高級茶と下級茶の価格差は縮小傾向にある。そのため、昔ながらの茶草場農法を行う農家も、減少しつつある。

2 世界農業遺産申請のきっかけ

静岡県のプロジェクト研究で、耕作放棄地の害虫を調査していた際に、筆者らは害虫の発生がなく、植物の生物多様性に富んだ植生を見出した^{2,3)}。これは耕作放棄地ではなく、水田跡地を茶草場として利用していた採草地だったのである。茶草場は、本来は山の傾斜地に位置している。しかし昭和40年代に茶園の面積が拡大した

*静岡大学農学部 Shizuoka University Faculty of Agriculture

**農研機構 農業環境変動研究センター Institute for Agro-Environmental Sciences, NARO

Keywords: 1) 世界農業遺産, 2) 茶草場, 3) 半自然草地, 4) 指標植物, 5) 認証制度

時期は、茶草場が不足したため、減反政策で利用しなくなった棚田等を茶草場に転用する例が多く見られたのである。その後、静岡県農林技術研究所と農業環境技術研究所の共同調査により、茶草場には草地性の植物だけで300種が認められ、植物の多様性に富んだ草地であることが明らかとなったのである^{4,5)}。これらの研究成果を発表する中で、国内外の研究者が茶草場を見学に訪れるようになった。「こんなもののどこが珍しいのか」「こんなものはどこにでもあるのか」と言っていた地元の人も、海外からの研究者が茶草場に驚嘆するのを見るうちに、少しずつ、茶草場の価値を認識するようになっていった。

2010年に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締結国会議(COP10)が開催された際に「茶草場」が注目され、翌3月の国際 SATOYAMA イニシアティブ定例会合の現地視察に選ばれた。地域の方々は、会場を茶草場の草花で飾り、地域の伝統食を用意して、最高のおもてなしを用意していた。それが2011年3月12日、東日本大震災の翌日のことである。そして、震災を受けてエクスカースションは中止となった。世界に向けて地域の誇りを感じていた地域の人たちが、これ以上ないくらい落胆する姿を前にしたとき、筆者が考えたのは、「世界農業遺産としての評価」であった。ただし、世界農業遺産の申請を提案した当初は、「そんなものは、いらない」と反発する声が多かった。世界農業遺産に登録されると、子どもたちにも大変な農法を強いなければならないのではないかと、また、農地の構造改善や農薬散布などが制限されると誤解されていたのである。しかし、FAOの世界農業遺産は、UNESCOの世界遺産と異なり、農業や地域を振興するための制度であり、農地の利用や農薬の使用に関して制限や義務がないことを、ていねいに説明をして回る中で、次第に、世界農業遺産の登録に向けた体制が整っていった。当初、反対を唱えていた人たちは、それだけ地域の将来を深く考えていた人たちでもある。「祖先から受け継いだ茶草場農法は地域の誇りだ。自分たちが後世に引き継いでいく」とFAOの視察があったとき、力強く語ってくれたのは、反対をしていた人たちだった。こうして2013年5月に開催された世界農業遺産国際会議において、川根本町、島田市、掛川市、菊川市、牧之原市の5市町を範囲として、「静岡の茶草場農法」が世界農業遺産に登録されたのである。

3 茶草場農法の認証制度

世界農業遺産登録後に、「世界農業遺産『静岡の茶草場農法』推進協議会」では、茶草場農法実践者の認証制度を制定した。この認証は、各農業者の良質茶の生産活

図1 掛川市東山地区における茶草場の分布

動において生物多様性を育む茶草場を維持することへの努力と貢献度を指標とし、経営茶園面積に対する茶草場面積の割合に応じて3段階で認定している。この認証は茶の葉のマークの枚数で表されており、茶園面積の50%以上の茶草場を有する場合が最高ランクの「三葉」、25%以上50%未満の場合が「二葉」、5%以上25%未満で「一葉」となる。静岡の茶草場の認証制度は、大きく2つの特徴がある。1つは、「茶」ではなく「人」を認証する制度ということである。茶は流通が複雑であり、農家の生産した荒茶が、直接、消費者に販売されるのではなく、「合組」という技術により、複数の産地の茶がブレンドされて、味が調えられ、最終的な商品となる。そのため、世界農業遺産ブランドの恩恵が商品を販売する流通・販売業者だけでなく、世界農業遺産の担い手である農家も受けられるようにすることが、農家を認証することの目的である。この認証制度は、生物多様性への貢献度を評価するものであり、茶の品質を保証するものではない。しかし、茶草を入れることで茶の味が良くなるという経験的な評価によって、認証されたお茶は一定の評価を得ている。この実践者認定制度を基礎として、茶草場農法実践農家の茶を「茶草場農法」と表示して販売する製茶加工業者の認証が行われ、また、茶を使った加工品や茶草場農法を支援する企業の商品に表示する場合の「応援制度」があり、「農家」「製茶加工業者」「企業」のそれぞれが認証される。

もう1つの特徴は、GISを使い、科学的な計測によって認証が行われるという点である。実践者の認証は、茶園面積に対する茶草場の面積で評価される。しかし、茶草場は茶園の周辺に点在している。また、傾斜地であるため、農家自身も正確な面積を把握していないことが多い。そこで、申請を受けた市町では、現地確認とGISによる計測を行い、正確に茶草場面積を測定している。

現在、約580戸の農家が認証を受けており、認証面積は茶園約1200ha、茶草場約450haとなっている。生物多様性保全の貢献度を対象とした茶草場農法実践者の

認証制度は、世界農業遺産のサイトの中では、最初の事例であるとともに、極めてユニークな制度として、評価を得ているところである。

4 農家の誇りによる認証制度

筆者は、当初このような認証制度を作ることに対して、反対であった。理由の1つは、認証の基準があまりに厳しかったことにある。傾斜のきつい山の草地で草を刈り、持ち出して、茶園に敷く作業はすべて手作業である。厳しい基準を設けることは、認証制度に参加する農家が少なくなってしまうことを心配したのである。

もう1つの理由は、農家の差別感である。同じ地域や集落の中にも茶草場農法を行う農家と行わない農家がある。茶草場農法を認証するということは、同時に農法を行わない農家を区別することになる。また、農家は共同で茶工場を持ち、荒茶生産を行うことが多いが、茶草場農法の茶を厳しく認証するということは、茶草場農法の茶を区別して製茶しなければならないという技術的な問題もある。それよりも、誰もが自由に「世界農業遺産」という名称を利用できる方が、広がり期待され、地域全体が盛り上がると思ったのである。しかし、これらの心配は杞憂であった。現状では、筆者らが心配したようなことは一切、起こっていない。

現在の認証制度は、悪用を防止するという点では、不完全な制度である。たとえば、茶農家が共同の茶工場で荒茶生産を行う場合、認証は茶工場単位で行われる。その場合、茶草場農法を行わない農家を仲間外れにすれば、茶園面積に対する茶草場面積の比率は高まる。しかし、今のところこのような例はまったく問題になっていない。茶草を入れることを義務付け、ペナルティを課している地域もある。しかし、病気や高齢などで茶草を入れることのできない農家の茶草場は、周辺の農家が代わりに管理しており、実際には、ペナルティが支払われることはない。また、厳しい認証制度に参加できない農家も多いが、それらの農家も、自分の産地から認証農家が出ることを喜び、共に世界農業遺産を盛り上げてくれている。

また、茶草場の管理方法や、茶草場農法のやり方に関する決まりはないことも問題点の1つである。極端な例を考えれば、草を一本刈ってきて、草を一本入れただけでも、茶草場農法となる。しかし、どの農家も茶草を入れる作業に手を抜くことはない。現在の認証制度は、これまで共に協力して良質な茶づくりに励んできた「農村のきずな」と、手を抜くことなく良い茶作りに励んできた「農家の誇り」に支えられていると言ってよい。

厳しい認証制度から、世界農業遺産のプログラムに参

図2 生物多様性への貢献度を示す認証シール

加できる農家は限られており、このことは地域的な広がりや盛り上がりを難しくしている一因とはなっている。しかし筆者は、茶草場農法が維持されてきた背景には、茶草場農法の実践農家だけでなく、茶草場農法を行っていない農家の貢献もあったと考えている。茶園に草を敷くという農法は、古くは全国各地の茶産地で行われていたが、重労働であることから、次第に行われなくなってきた。一方、茶どころの静岡県では、茶産地どうしの競争が激しく、切磋琢磨して良質な茶作りが取り組まれてきた。茶草場農法は、そのような中で広く行われてきたのである。茶草場農法は、厳しい目と舌で茶の品質にこだわってきた茶農家や茶商など茶業界全体で守ってきた農法であるとも言える。現在、5市町で組織されていた「世界農業遺産『静岡の茶草場農法』推進協議会」の機能は、静岡県庁に移管され、県の「茶の都構想」の中で、より広がりを持った活動を図りつつあるところである。

5 指標植物による茶草場の評価

茶草場の中にもいくつかの類型があり、実際には、すべての茶草場で多様な植物種が保全されているわけではない^{5,6)}。そのため、茶草場の環境を維持していく上では、生物多様性をモニタリングしていく必要がある。しかし、「生物多様性」という概念や、種の多様性の調査は農家の方には簡単ではない。そこで、筆者らは、植物種の多様性と相関の強い指標植物種の中から、農家や一般市民が判別しやすい植物種としてタムラソウ、ツリガネニンジン、ワレモコウの3種を選定した^{5,6)}。現在、この指標植物の調査は、静岡県の環境保全型農業直接支払交付金の要件として採用され、農家に義務付けられている。ただし、義務付けられているのは、指標植物を調査することであり、指標植物が何種あったかは問われない。茶草場農法において農家にとって重要なのは、茶園に入れるススキやササであり、茶草場の植物は眼中になかった。指標植物の調査を義務付けている目的は、農家自身が茶草場の植物に目を向けてもらうことにある。実際に農家が指標植物の調査を行えば、3種以外にもさまざま

な草花を見つけることができる。3種以上の植物が見つかることは、農家にとって自慢になり、最近では、茶草場に作業に行くときにカメラを持参する農家も多い。

指標種を用いた環境支払はドイツで例が見られる。一方、英国では生物多様性の指標種 (Result) よりも、生物多様性保全のための取組み (Act) を評価する傾向にある。筆者らの調査から、静岡県の茶草場では、茶草場の歴史や履歴が植物の多様性に大きく影響することが明らかとなった。また、地域間や場間の多様性 (β 多様性) が大きく、このような地域の多様性が全体の生物多様性に寄与していると考えられる。そのため、指標植物の有無だけで農家の努力を評価することは難しい。このことから、特定の指標種で評価をするよりも、茶草場の管理という Act を評価する仕組みが適していると考ええる。

6 観光への活用

「世界農業遺産」というブランドの具体的な活用方向は、大きく農産物の付加価値化と観光への活用の2つがある。しかし、世界農業遺産を観光資源とするには課題がある。世界遺産は、建物や景観など不動産が認証されているため、観光客は世界遺産の価値が十分に理解できていなくても、その場所に観光に行くことができる。これに対して、世界農業遺産は、農業システムが評価されることから、観光客はその遺産を見ることができないため、観光客への説明が必要となる。そこで筆者らは、世界農業遺産への登録を前に、タクシー運転手や観光バスガイドが世界農業遺産の語り部となってもらえるように、観光協会に対して勉強会を行った。その成果として実現したのが、「茶草場タクシー」である。このタクシーは予約制であるが、新幹線の掛川駅からタクシードライバーが茶草場をガイドしてくれる。また、茶草刈りの体験や、茶草場の散策など、農家の企画による茶草場ツーリズムも行われつつある。実際には、茶草場ツーリズムが農家にもたらす直接的な利益は少ない。しかし、茶の消費量が減少している中で、ツーリズムを通じて消費者と生産者が交流を持つことにより、茶産地や緑茶のファンができ、顧客が増えるという効果が期待されている。

茶草場農法は、専門家による評価によって世界農業遺産に登録された。しかし、観光客に魅力を伝えるためには、自分たちの言葉で語ることが大切となる。茶草場は茶畑の横や、農家の裏や、通学路の傍らなど身近な場所にある。専門家の「外部評価」を、自分たちにとっての「内なる価値」に変えるために、現在、ワークショップや茶草場の魅力を表現する文化祭などが実施されている。

7 世界農業遺産にとって大切なものは何か？

世界農業遺産の中心エリアである掛川市東山地区の皆さんは、茶草場農法を世界にPRするために、ポスターを作成した。地域の農家の方々は、どのようなポスターを作っただろうか。

意外なことに、そのポスターには、静岡県のシンボルである富士山も美しい茶畑の風景もない。そのポスターに大きく描かれたのは、昔から茶草場を守ってきたおばあさん、今、茶草場を守っているお嫁さん、そして、おそらく将来、茶草場農法の守り手となるであろう子どもたちであった。どれも、農家の方々が、自分で撮った写真である。このポスターを見たときに、私は、この人たちは世界農業遺産にとって大切なものがわかっていると強く感じた。世界農業遺産にとって、もっとも大切なものは生物多様性ではないし、美しい風景でもない。生物多様性や美しい風景は、農業や農村での暮らしがあって、初めて守られるものである。世界農業遺産にとって、もっとも大切なものは「人」であるということを、これらのポスターは雄弁に私たちに教えてくれているのである。

写真2 地域の方々が作った茶草場農法のポスター

参考文献

- 1) 小椋純一 (2006): 日本の草地面積の変遷. 京都精華大学紀要 30, 159-172.
- 2) 稲垣栄洋・大石智広・高橋智紀・松野和夫 (2008): 静岡県茶園地帯に見られる管理された茶草ススキ草地. 雑草研究 53: 77-78.
- 3) 稲垣栄洋・大石智広・松野和夫・高橋智紀・伴野正志 (2008): 静岡県菊川流域における植生の異なる休耕田にみられる動植物. 緑化学会 34: 269-272.
- 4) Inagaki H. and Kusumoto Y. (2015): Assessment of GIAHS in Shizuoka: The traditional tea-grass integrated system. Journal of resources and ecology, 5(4), 398-401.
- 5) 楠本良延・稲垣栄洋 (2014): 草原の維持による特異な生物多様性の保全. 環境情報科学 43, 14-18.
- 6) Kusumoto Y. and Inagaki H. (2016): Symbiosis of Biodiversity and Tea Production Through Chagusaba. Journal of Resources and Ecology, 7(3): 151-154

Keywords: 1) Globally Important Agricultural Heritage Systems (GIAHS), 2) Chagusaba (Traditional tea-grass integrated system), 3) semi-natural grassland, 4) Indicator plant, 5) certification system